

ミクロの探検隊®を開催

●博物館

博物館は、7月9日(土)、「ミクロの探検隊®名古屋大学ムシを電子顕微鏡で観察しよう 観察園のムシ」を24名の参加者とともに開催しました。

あいにくの雨模様で、観察園でのムシの「ビーティングネット」採集は中止になりましたが、事前に用意したムシを使用してプログラムを進めることが出来ました。午前中



実体顕微鏡下のムシのスケッチをする参加者

は、実体顕微鏡を使ったムシの観察・スケッチ・写真撮影を行いました。最初は慣れない実体顕微鏡でしたが、30分もすると小学生も上手に使いこなすようになりました。また、顕微鏡スケッチも飽きずに一心に取り組み、「見たい、知りたい」という熱心な気持ちが伝わってきました。午後はいよいよ各自で行う電子顕微鏡観察です。自分が作った電子顕微鏡試料が、目の前の画面に映し出され、どんどんと倍率が上がっていくと歓声が沸きました。可視光では見えない世界でも、そこには思いもかけないきれいな形(構造)があります。また、構造がムシにとってどんな意味があるのかを講師の先生方から説明を受け、熱心に聞き入っていました。初めて操作する走査型電子顕微鏡に最初は緊張気味でしたが、慣れてくると自分の手でどんどん拡大されていくミクロの世界にすっかりひきこまれていったようでした。最後に自分自身で撮影した電子顕微鏡写真のポストカードを作り、記念として持ち帰りました。

博物館では展示だけでなく、自然を知ることが真の教育と考え、また、それが科学や芸術にも繋がると考えて、ミクロの探検隊などのイベントに取り組んでいます。

第15回特別企画展「平成28年熊本地震」を開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、5月18日(水)~7月9日(土)までの間、減災館において、年間の特別企画展示のスケジュールを急遽変更し、第15回特別企画展「平成28年熊本地震」を開催しました。

2016年4月14日21時26分に熊本県熊本地方を震源とするマグニチュード6.5(震度7)の地震が起こり、その2日

後の4月16日1時25分には、マグニチュード7.3(震度7)の地震が、再び熊本地方を襲いました。その後も、熊本県から大分県にかけて、九州を横断するかたちで継続して地震が続き、最初の地震ですでに大きな被害を受けていた建物の被害が、2度目の地震で拡大しました。さらに、地震の揺れが継続したことから、住宅の倒壊を恐れた多くの人々が避難所・車中で避難生活を送りました。

減災連携研究センターでは、地震発生直後より、被災地に先遣隊を派遣し、被災現場の状況把握を行なうとともに、今回の地震の被害像の究明に取り組みました。また、東海圏の人々に、被災状況をいち早く伝えるために、緊急報告会の開催(4月26日開催)、緊急災害情報集約拠点(MeDIC)の開設にも取り組みました。

今回の展示では、少しでも被災地の復興の一助になるようにと、解析・分析過程にある情報を幅広く公開しました。災害発生からわずか1ヶ月で開催した企画展は多くの人の関心を集めました。



展示会場の様子

シンポジウム「熊本地震に学び、今後に備える!」を開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、6月30日(木)、減災館において、同センターシンポジウム「熊本地震に学び、今後に備える!」を開催しました。本シンポジウムは、平成28年熊本地震から2ヶ月半が経過し、これまでの防災・減災の盲点は何かを見出し、今後の南海トラフ巨大地震への備えについて考えることを目的としたものです。



パネル討議の様子

まず福和同センター長からあいさつの後、3つのパネル討論と統合型地震応答体感環境「BiCURI」による地震の揺れ等の実演が行われました。「被災後の対応、復旧・復興のあり方を考える」では、鍵屋 一跡見学園女子大学教授らからの報告があり、災害時、行政対応には限界があることを知ったうえで、災害前に備えをしっかりとしておくことの重要性について議論されました。「熊本地震は想定内だったか～防災上の問題を考える」では、古村孝志東京大学教授らから九州や熊本地方における活断層・地震断層、地学の視点から報告があり、地域を知ることの重要性が示されました。その後、「BiCURI」を用いた熊本地震での益城町での震度7の揺れを実演し、「建築・土木構造物、地盤等の被害～南海トラフ地震への教訓」では、斉藤大樹豊橋技術科学大学教授らの報告があり、複合災害に対する備えや革新的な技術開発の必要性について指摘されました。

野田同副センター長から総括として、熊本の早期の復旧・復興を祈念するとともに、南海トラフ巨大地震を克服するための事前の徹底的な備え、リスク回避文化の醸成、産官学民や研究分野間の多様な連携の更なる展開への期待が述べられました。